

島々へ



ヤマザキマリ 聖なる島々へ

Mari Yamazaki
to
the Holy
Islands

「沖縄はここ数年、毎年のように訪れています」と語るのは、『テルマエ・ロマエ』の作者であり漫画家・文筆家として活躍するヤマザキマリさん。
二〇二二年五月に復帰五〇周年を迎え、ますます注目を集める
沖縄の魅力を探りに、沖縄島から宮古島、伊良部島を旅する。

伊良部島の隣、下地島の北側に広がる「下地島空港 RW17END」(通称「17エンド」)。沖縄などでサバニと呼ばれる木造漁船に乗って。



島の南部に 点在する 遺跡の数々

沖

縄が日本に返還された
その年、ヴィオラ奏者
である母が所属してい
た札幌のオーケストラが遠征公演
をするようになった。その時、沖縄
がどんなところなのか知らない
幼い娘たちに彼女が持ってきたお
土産は、どこかの浜辺で見つけた
という殻に六本の尖ったツノのつ
いた貝殻だった。これね、貝形のお
守りなんだって。沖縄の海にはこ
んな貝があるのよ、と母の説明は
至極あっさりしていたが、今思え
ば、私の沖縄への興味の発端はあ

斎場御嶽

二〇〇〇年二月に
世界遺産登録された、
琉球王国最高といわれる聖地、
御嶽内の三庫理(写真1)は、
当面の間立ち入り制限が
行われているため、
柵の移動や立ち入りは不可。
沖縄県南城市知念字
久手堅地内



の貝殻にあったよ
うに思う。

戦争の苦い記憶
を簡単に忘却でき
ずにいた当時の母
にとって、沖縄は

楽しい気分です訪れられるような地
ではなかったらしいが、実際に目
の当たりにした沖縄の優しくも神
秘的な海の色は、彼女の心中に巣
食っていた不穏をたちまち掻き消
したという。神様が住んでいそう
なこんな綺麗な場所を戦をするな
んで本当に人間ってどうかしてる
わね、と母はその後何度か映像
で沖縄を目にするたびに独りごち
ていた。

私

が沖縄を初めて訪れた
のはそれから三〇年近
くも経ってからだ。こ
の取材で何度目になるのかもう覚
えてもないが、今回足を運んだ
南部には、実はこれまでほとんど
行ったことがなかった。一度だけ
夫と息子の三人でレンタカーを借
りてざっくり巡ったことはあった
が、古代文化に強い関心をもって
いる夫や私が南部に点在する琉球
王国の遺跡についてまったく情報



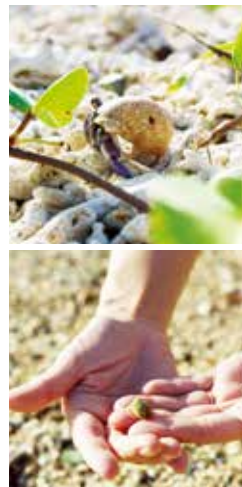
斎場御嶽には6つの拝所があり、
祈りの場所にふさわしい厳かな空
気に包まれている。拝所をつなぐ
道々にも豊かな緑が広がる。

をもっていなかったことを今更不
思議に思う。

沖縄には御嶽と呼ばれる拝所が
点在しているが、なかでも琉球王国
時代に国家の最高神職が管理し、ユ
ネスコの世界文化遺産にも登録さ
れている「斎場御嶽」は、聖地中の
聖地である。敷地内に鬱蒼と茂る
草木の道を独特な蟬の鳴き声を浴
びながら懸命に歩いていると、一
瞬海への視界が開けた辺りで、背
後を歩いていた現地に住むカメラ
マンのO氏から「ヤマザキさん、こ
こから久高島が見えますよ」(写真
2)と声を掛けられた。振り返ると
太陽の光を反射して水面を光らせて
いる海の向こうに鳥影が見えた。
「あの島は琉球民族発祥の地であり、
神の島です。だから観光で訪れる
場合にもいろいろと制限があるん
です」とO氏が説明を加えた。
神の世界であるニライカナイに
住むアマミキヨが舞い降りたのが
久高島であり、琉球の歴史はまさ

石積みアーチ門が
印象的な「知念城跡」。
1972年に国の史跡
に指定されている。





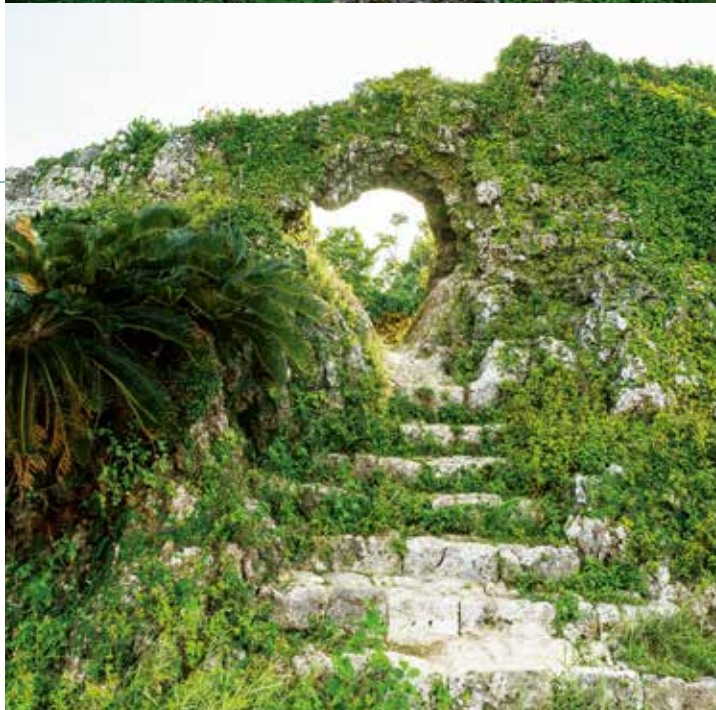
地に漂う 崇高で 神聖な気配

知念城跡

国指定史跡の城跡。切り石積み
のミグスク(新城と、自然石を積んだ
クグスク(古城と呼ばれる
二つの郭からできている。
沖縄県南城市知念字知念1033-3

糸数城跡

沖縄島南部で最大級のグスク。
琉球石灰岩を積み上げた城壁が
広域にわたり築かれており、
まるで中世を思わせる景観に。
沖縄県南城市玉城字糸数133



玉城城跡

標高約一八〇mの天然の要塞に築かれ、
その仰ぎみる様子から天空の城と称される。
城門まで登ると、
天気の良い日には久高島なども望める。
沖縄県南城市玉城字玉城444

にそこから始まったとされている。
そもそも斎場御嶽は久高島へ祈り
を捧げるために設えられた巡礼地
であり、歴代の琉球王国の王が詣
できたらしいが、最近では「パワ
ースポット」という安直な言葉で
紹介されていて、それを現地の人
はあまり快く思っていないらしい。
確かに切り立った岩肌や存在感の
強い周囲の植生に覆われた空間に
は特別な空気が漂っているが、神

に對しての敬虔な信仰をもつ者は、
私たちのような外部からの来訪者
にはわからない、より崇高で神聖
な気配を強く感受するのだらう。ど
の国でもその土地の人々の信仰を
培ってきた聖域を訪れた時に感じ
る侵入者の意識は、ここでも避
けられない。
斎場御嶽から約三kmほど離れた
ところにある「知念城跡」も、易々
と人を寄せ付けない立地*という

意味では完璧と言っている。あま
りの足場の悪さにサンダルを履い
てきてしまったことを後悔するが、
いざとなったら裸足になる覚悟を
決める。神の宿る場所というのは
そう簡単に到達できるものであつ
てはならない。昔テレビでやって
いた人跡未踏の地をゆく探検隊の
シーンを頭に思い浮かべつつ、頭
上に枝を張っている巨大な樹木か
らだらりと垂れ下がっている気根
にターザンさながら両手でしがみ
つき、ぬかるんだ土に足をずるず
る滑らせながらほとんど勢い任せ
に起伏の上り下りを繰り返す。沖
縄の自然は人間のような甘やかさ
れた生き物にはまったくもって容
赦ない。
暑さと湿気で汗まみれになりな
がら、ゴールがどこにあるのかも
わからずに進んでいると、突然目
の前に人為的に石の積まれた構造
物が現れた。どんな遺跡を訪れる
時でも私が一番興奮を覚える瞬間
だ。計り知れない労力が費やされ
たであろうそうした建造物には、強
烈な存在感が封じ込められている。
固く積まれた石の壁はまるで欧州
や中東に残る中世の古城とそっく
りで驚くが、Webサイトで見つけ
た解説を読めば築城時期はおおよ
そ一二〜一三世紀とあるから、ほ
ぼ私が頭に思い浮かべたいくつかの十
字軍の城と同じ時期のものになる。

スマートフォンで出入り口と思
しき木材で補強がされた場所に腰
掛けている写真を撮ってもらった
が、画像を見ると一般的な人々が
イメージする沖縄らしさは微塵も
ない。海外の古城の遺跡で撮影し
たと言っても皆信じるはずだ。知
念城跡だけではなく、その周辺に
点在する「糸数城跡」も「玉城城跡」
も観光客の来訪を意識した過度な
整備は施されておらず、その佇ま
いは時間の経過によって自然と一
体化している。
何世紀にもわたって雨風や強烈
な日光に晒されてきた琉球石灰岩
のブロックの隙間に元気に根を張
る南国の植物に、人間の築いた文
化に寄り添う自然の寛容さを感じ
取る。琉球の神はそうした細部に
も間違いなく宿っている。
こ
こ一〇年ほど、日本に
戻っている間一度は必
ず沖縄で数日間過ごす
のが恒例になっているが、宿泊す
るのは一番最初に沖縄に滞在した
時から北部の本部町か今帰仁村と
決めている。初めて滞在した沖縄
が北部中心だった理由は、当時ポ
ルトガルのリスボンの小学校に通
っていた息子にある。日本の知人
から送られてきたDVDに「沖縄
美ら海水族館」で飼育されている
人工尾びれをつけたイルカのドキ

*知念大川から入るルートを利用した場合。別のルートもあり。